

UIFA JAPON

NEWSLETTER

■主な内容

UIFA JAPON 2002 座談会—10周年を迎えて
特集 女性と建築
仕事をする女たちのこれまでとこれから
「林雅子展」を観る
3人の女性先駆者が語る住まい・女性・社会
次回 UIFA 世界大会についてのアンケート結果
ユニバーサルデザインを考える
水彩フェスティバル報告
役員会報告



座談会

UIFA JAPON 2002 座談会—10周年を迎えて 新たなステージを展望する

前回のニューズレター52号の総会報告で、UIFA JAPON が新体制となったことをお知らせしました。今回は、小川信子新会長、正宗量子副会長、松川淳子副会長のお三方に集まっていただいて、UIFA JAPON の今後について語り合っていました。

—今年度よりUIFA JAPONが新体制になり、7月に活動方針案が出されました。10周年ということで、世界ネットワークの構築と東京圏以外の地域の活性化、地域重視という2つの柱がありますが、これについてお三方のご意見をお聞かせください。

小川 UIFA JAPON のこれからの活動としては、その2つの柱が基本になるのではないのでしょうか。国内でいうと、会員一人一人のことを熟知していないということが反省点です。そこで地域重視、会員のエンパワーメントをどうにかしたいと思いますもうひとつは、世界とのネットワーク。UIFA には、国際会議を通して、世界の中で建築をつくり環境を考えるという目標があるわけですから、それを基本とすれば、まだ私たちは日本の状況を発信していませんね。UIFA というのは、個人参加の団体ですが、いくつかの国ではグループとして活動しているので、相互に交流ができれば良いと思います。



私のスウェーデンの先生が世界的な「核反対建築の会」を組織していますが、その動きをみると、生活者の視点から問題提起をしています。そういう動きを考えると、やる事がいっぱい出てきそうです。今までは組織の地固めの時期でしたけれど、これからは前を見る必要があるのではないのでしょうか。それに今は、地球規模ですべてが動いていますね。気候風土でいうと、モンゴルは早魃でしたし、スウェーデンではブルーベリーの葉がチリチリ

枯れて、やはり早魃だそうです。人間も環境も繋がっているということで、広げて考えていかなければと思っています。

松川 スウェーデンからお帰りになったばかりの迫力あるお話ですね。UIFA JAPON は人数が少ない100人程度の会ですから、一人一人の力が発揮できる環境をつくれれば、もっと成長できる組織だと思います。会をつくる段階では、少数が引っ張っていくということが必要で、中原先生が10年頑張られて、小川先生が引きついでくださった2期目にはいるわけですから、今度は一人一人が頑張っ自分達で動いたり、組織を引っ張ったりするのがいいと思います。世界のネットワークとしては、ド・ラ・トゥールさんとの縁も深めたいし、ネットワーク構築のためにいろいろな国の人と付き合うことでUIFAの組織自体も活性化したいと思います。東京圏以外の方は、イベントに参加したくてもなかなかできないというデメリットがありますから、それを何とかしたいと思っています。「あらゆるイベントは東京以外のところでやろう」と大胆な提案をしたこともありますが、それは不可能ということになりました。でも個人個人で行う活動を繋げることで、実現していくのではないかと思います。

正宗 私は98年のUIFA国際会議日本大会以来、「おもてなし」の精神で人との関係を構築していく事がUIFAにとって大切だと考えております。地球規模のお話しをしていただきましたので、私が経理を担当している関係から会費について話しますが、9月現在で会員112人のうち三分の二程度しか納めていないという現実があります。そのうちの10人は、3年以上納めていません。積極的に関わろうという意志がないように思うのですが。会費だけで測れるものではありませんが、どうしたら活動の環を広げられるかと。これから会員の力をどう発揮していただくか、細かいことで申し訳ありませんが、会費は100%納まるような組織でありたいと思うのです。

—小さな組織でも成長できる組織であるためには、現実的な問題もからんでいますね。

小川 会費で維持しているの、収入源を確保しないと。一人一人が力を発揮して何かやろうとしても、活動ができません。実は、今PODOKOの歴史を書いているのですが、最初はどうかとみたら、皆で同じ仕事をしたんです。モダンリビングの原稿を分担して書いて。そういう共同作業をすることで、お互いを理解したのですが、日本大会の時は、まさに共同作業でしたね。



松川 1992年に会を設立した時は会員が30人位でした。日本大会の呼びかけをはじめたころで60人、その後急激に増えて、大会のときは150人程度になったのですが、今は大会準備の頃のような人数です。会員でないと発表できなかったから、それで会員になった

方もいらしたのしょうね。それはそれでよいのですが、現在の会員がきちんと力を発揮して動くことができれば、それはすごいことだと思います。私の場合も、会員になっていてもあまり活動しないで、会費だけ払っている状態になっている会もあります。それは高い情報ももらっている、応援しているという関わり方でもいいんですね。周辺にいる会員も必要です。会費を払わないのは困りますが、会員数だけが多くなくても、それはそれでよいのではないのでしょうか。

—会員の年齢構成はどうでしょうか。

松川 一般的にみて、会員に20代はほとんどいませんね。建築家が多く集まっていますから、一級建築士をとって、仕事をして、そこでUIFAのことを知って、というところある程度年齢が高くなります。30代、40代も少なく、50代、60代が多いです。アンケートをしてみると、40代では忙しくて時間がとれないという事情がわかりました。これはどの組織でも同じことです。60代ばかりというのは淋しいので、なにか自分も担えるという若い人がでてくればと願っています。学生会員という制度もつくったのですが、あまり活用されていません。大学の先生に呼びかけていただかないといけませんね。UIFAの魅力として、正面から国際交流を目的のひとつに掲げている組織は他にありませんからその点を強調していきたいですね。学会でも建築士会でも国際交流をしています。UIFA JAPONのような形のものはありませんから。

—国際交流という魅力を引き出すために、国際ネットワークの構築が必要ですが。

小川 PODOKOのときに国際会議に代表を送ったことがあるのですが、第1回学生国際会議に送り出したのが黒川紀章さんです。それから建築労働者会議に鳥羽てるさんを送り出しました。年齢や男女を超えてやっていたのです。何かイベントがあると結束しやすいのですが、それを日常的なレベルでどう継続するかが課題ですね。あとに若い方が続かないというのは困ります。

—今度の10周年記念行事の機会にUIFA JAPON国際会議第2弾のようなことを考えてみてはどうでしょうか。地域活性化、地域重視についてのご意見をお願いします。

松川 少数でも北海道や茨城、名古屋、兵庫、九州に会員がいらっしやいますが、一人だけいらっしやるような所を大事にしていけないといけません。それがニューズレターの大事な役目だと思います。その方たち

にスポットライトを当て、巻き込むようにしていただきたいと常々思っています。イベントを地方で開催するのは大変かもしれませんが、ニューズレターを通して、どんな仕事をなさっているのか紹介することはできますね。東京以外の都道府県の建築士会をみると、地方は女性の活躍の場が多いようですから。地方会員の方を紹介するようなコラムをつくるというのではないですか。「地域で生きる」とか。

小川 年齢を縦割りにして、シンポジウムやワークショップをするのもいいですね。

正宗 UIFA自体の宣伝も必要ですね。

松川 基本的には活動をしていないと。活動を発表していくことが大事です。

—ニューズレターでは、会員の活動「この指とまれ」の企画を常時募集していますが、これもさらに宣伝したいと思います。最後に今後のUIFA JAPONの方針、ヴィジョンを端的に示す言葉をお聞かせください。



正宗 以前レースワークという言葉を使いましたが、今度は「綾錦」。縦糸と横糸、そして斜めの糸を綾織にしたそういう日本の良さを発信するような組織でありたいと思います。

松川 「自立と連帯を地球上に広げる」ということでしょうか。

小川 アルバ・ミルダールの「共生の社会」。古くて新しい言葉ですが。思い切って言ってしまうと、民主的、つまり会長がいない組織ができればいいと思っています。皆が役割分担をし、そのときの役員構成で仕事をしていく。同じ立場で責任を負っていく。そういう組織を目標にしたい。でもそれは成熟しないとできないことですね。今回二人に副会長をお願いしたのは、組織を開いたものにしていくという意味があるのです。役割を分かち合うという意味で。

—そういう意味があったのです。会員全員が何らかの役割を負って、積極的に活動する組織でありたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

小川 信子 UIFA JAPON 会長

東京に生まれて育ちながら、何故か北海道や北欧のようなはりつめた空気が好きで、その中で人間の営みに興味がある。私と同世代の同潤会アパートを生かす会を、若い人達と立ち上げたのも、人間の営みと歴史を環境が語っているからであり、70才代の生き様を、皆さんより一足先に経験するのが、女性と環境を考えてきた私にとって、胸騒ぐ思いがあるからです。

正宗 量子 UIFA JAPON 副会長

現在28年前に設計した鉄筋コンクリート造の教会にエレベーターを増築中。ユニバーサルデザインやバリアフリー建築とは何かについて考えさせられている。正宗量子一級建築士事務所主宰。一級建築士。インテリアプランナー。日本女子大非常勤講師。日本建築学会、生活学会、JIPAT、各正会員。主な著書、「住まいの台所100章」(鹿島出版会)「生活学事典」(TBSブリタニカ他)。

松川 淳子 UIFA JAPON 副会長

建築計画、地域計画専攻。大学勤務等を経て、友人たちと生活構造研究所設立に携わり、はや、20年以上が経過。地域の生活調査、構想・計画づくり、施設計画等に全国を駆けまわる。1983年、UIFAパリ大会に参加し、その楽しさに感わされて事務局を引き受け、「雑用担当理事」をつとめている。UIFA第12回日本大会実行委員長。(株)生活構造研究所代表取締役。一級建築士。この座談会は2002年9月21日に目白の小川建築工房において*広報委員が収録したものをまとめました。

司会、渡辺喜代美。記録担当、井出幸子、田中厚子、中野晶子

特集：女性と建築

春から女性達のエネルギー溢れる催しが続きました。そこで今号は特集を組み、各企画に関りの深い方々にご執筆いただきました。

■ 各催しの日程

「女性と建築展」

女性と仕事の未来館 3/15～8/20
4/20 パネルディスカッション
「住まい・まちは働く女性をサポートできるか？」
5/22 トークセッション
「共働き夫婦のみた住まいとまち」
6/22 トークセッション
「仕事と家庭の両立におけるコミュニケーションの可能性」
7/13 シンポジウム
「日本の女性建築家を変えたもの」

「建築家 林雅子」展

東京・ヒルサイドフォーラム 9/4～15
大阪・大阪市立住まいのミュージアム 9/20～10/6
8/31 シンポジウム
「4人の女性建築家が語る林雅子」
9/7 トークセッション
「戦後住宅の潮流と林雅子」Ⅰ
9/21 トークセッション
「戦後住宅の潮流と林雅子」Ⅱ

3人の女性先駆者が語る住まい・女性・社会

旧同潤会大塚女子アパートメントの現代的価値—
8/3 シンポジウム 東京ウィメンズプラザホール
9/9 見学会

仕事をする女たちのこれまでとこれから

編集者 植田実

■ 「未来館」という町で出会った女性建築家たち

港区芝の、交通機関でいえばJR田町駅や地下鉄三田駅から直ぐのところにある「女性と仕事の未来館」で、この3月15日から8月20日まで「女性と建築展」が催されました。かなり長期間の展示でしたが、内容の濃さはその期間に見合っている。つまり何度か通わないと消化できないのです。モノや図像類以上に、解説や年表がしっかりしている。でもカタログがあるわけでもないので、読むためにはここに来なければならない。「読むテンジ」なんてシャレしても仕方がないけれど、しかし、女性のことが日頃よく見えていない者の目を開かせるに十分な展示構成でした。

女性史年表は、やはりそれだけが取り出されて構成されると思いがけないことに気づくわけですし、吉田文子さんと浜口ミホさん、また、林・山田・中原設計同人など、女性建築家の先達の仕事が、使われていた製図机や道具やアルバム、あるいは、作品パネルを通じて生き生きと感じられるコーナーをはじめ、現在各分野で建築や住まいにかかわる活動をしている女性たちの多様な生き方がよく見えるコーナーまで、あるいはまた、様々な家族とその住まい形態を系統立てて紹介したり、そしてそこではなじみのある建築家に出会うのはもちろんですが、初めて名をきく人もあり、その仕事もまた魅力的で、つまりは小さな町のような展示でありました。関係資料や本も町の図書館みたいな雰囲気と並べられて、そういう町であれば何度も通って当然です。この未来館そのものが、図書室も喫茶室もサロンも子どもの部屋もある、けっこう気持ちのいい町みたいに仕立てられ、これがまたうまい具合に、第一京浜の大通りから敷地の奥に隠された別天地として建てられているのです。

■ 印象的だった4回のパネルディスカッション

この施設の中にあるホールとロビーで「女性と建築展」を機に、4回のパネルディスカッション、トークセッションなどがありました。私は、第1回のパネルディスカッション「住まい・まちは働く女性をサポートできるか？」に参加し、第4回のシンポジウム「日本の女性建築家を変えたもの」にコーディネーターとして関わったのですが、この二つの会の対照がとても印象に残りました。前者では「働く女性をサポートできる」どころでは

なく、問題が山積していることを指摘して発言が活発化しました。小川信子さんは働く女性を世に次々に送り出して来た立場から、女性の自立をどう考えるか。共働き家族のために保育環境づくりがちゃんとなされているか。保育を中心とした、即ち福祉のまちづくりが行われているか。サリドマイドの事件が教訓として生かされているか。と言った視点からご自分の活動の足跡を巡りながら話をされて、ディスカッションに具体的なよりどころを示されました。

樋口恵子さんは「何てったって女性は晩年は一人暮らしが必然なのよ。一人暮らし500万人の8割が女性だから」という圧倒的な現実から始めて、仕事と家庭が両立しないままの構造改革なんてあり得ないと、問題をもっと大きな場に設定されました。そして住まいやまちづくりの現場では、建築家の工藤和美さんがご自分の手がけられた仕事のなかで、小さな発想や工夫が地域を少しずつ変えていく可能性をポジティブにはなされ、一方、「見たくないものを見せてしまう家族社会学」と自らの専門を紹介する山田昌弘さんが、例えば共働きが波及していくなかで、育児や家事がますます効率化を求め、人が安らぎを求めるのは家庭より職場になってしまうと言う社会現象にひそむネガティブな方向性を指摘されて、建築や都市計画の作用を厳密に検証するには欠かせない、社会学の方法論を強く印象づけられました。

■ 日本の女性建築家が「変えたもの」は

7月のシンポジウムでは、これと対照に、というより、ある意味では前者の方向を裏付けるような感じで、パネリストのどなたもが先ず「変えたもの」なんか無い。いや変えたなんて断言できない、という始まり方で、自分なりにやれることをやってきただけという自覚のなかでは、大上段にふりかざす結論を一概に控えられたのは当然ともいえます。プランナーの越野圭子さんは、仕事がるごと即生活の男に比べて女性は暮らしに密着した軸にることによる視野の広さとバランスがもてているのかなと自問しながら、各地域からの情報発信媒体として発行している「まちまち通信」を紹介してくださいました。建築家の平倉直子さんは、これまで手がけてきた住宅設計、あるいは国立公園などの仕事の一つ一つを固有解として見てきたつもりだが、それらが社会につながっ

ていくときに、実は一般解となっている。その一般解とは女性なりに対象を受け止めようとするときに分かりやすくビジュアルな表現に向かう結果であり、その波及効果を実感されているようでした。

もう一人のパネリスト、中原暢子さんには、その前に、林・山田・中原設計同人についてインタビューし、またUIFAの総会でもただ一人の男としてまぎれ込ませていただいて現実を直視する中原さんのお人柄に深く感銘するところがあったのですが、このシンポジウムでも、「女性の社会進出とか、住宅は女性分野と言われたことは、マスコミの表現にすぎず、実際はそこにしか仕事なかった」と断言されます。ここにこそ、女性の現実があったことを納得せざるをえなかったのです。

■旧同潤会大塚女子アパートメント保存と林雅子展

このシンポジウムが終わってまもなく、次には旧同潤会大塚女子アパートメントの現代的価値を検証しながら、小川信子さん、赤松良子さん、駒尺喜美さんが、ビデオ上映や再生の提案をまじえてディスカッションする会があり、ここでもコーディネーターを仰せつかった私は、この一連の報告と話し合いが前から連続しているものであり、これから先に切れ目なく続いていくことを、そしてそれは従来のシンポジウムの形式では表現できないことを痛感しつつ、だからといって、新しい場とする発想を十分に見出せないままだったのがちょっと残念でした。

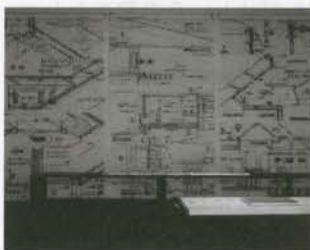
この夏、私がもっとも多くの時間を割いたのは、建築家、故林雅子さんの仕事を回顧する展覧会と作品集の出版のお手伝いです。この作業を通じて、女性建築家が生きてきた戦後半世紀の歳月が新たに蘇ってきたのです。9月初めに、やっとそのオープニングと本の出版が間に合っ、多少とも関わったものとしてほっとしたところですが、その安堵とは、ことが済んだのではなく、これからが何もかも始まりという、そのスタート時点の追い風の強さを感じてのことに他ならないようです。



林雅子氏



「林雅子」展で 右から
鈴木成文、植田実、渡辺喜代美氏



詳細図スクリーン



舞台装置

「林雅子展」を観る

神戸芸術工科大学名誉教授 鈴木成文

鈴木成文氏のホームページ「文日記」の「林雅子展」関連の記事を、ご本人の許諾を得てそのまま転載させて頂きました。サイトは<http://www.s-suzuki.com> です。(広報担当)

■2002.08.31.(土)

女性建築家が語る林雅子

シンポジウム「4人の女性建築家が語る林雅子」が雅子氏設計の中央工学校STEPで開かれ、小谷部育子氏が雅子の生立ちと居住の原風景、初期から晩年までの作品の一部を紹介、「コトは簡単にモノは少なく」「空間の骨格」「建築は地と人がつくるもの」という雅子の信条を伝えた。当代人気の木下庸子・妹島和代・貝島桃代の3人を集めたのはいいが、雅子からの影響のほか各自の居住体験やさらに自作紹介をさせたのは理解に苦しむ。

「雅子を語る」の主題がぼけた。「女はたいへんなのよ」という雅子の言を昌二氏は家庭と仕事の両立として語ったが、むしろ社会的立場の弱さではなかったか。もうそんな時代は過ぎたと思うのに未だに女性建築家を招けばその売出しが大事だと考えたのだろうか。

■2002.09.01.(日)

林雅子の解釈／先生方のHP

常々思うことだが歴史とは遺物や資料や伝聞を基に過去を解釈する作業だ。遠い過去だけでなく現代史もまた同じ。近いだけに資料は豊富だが解釈は逆に難しい。林雅子の解釈という歴史作業に今挑戦しているのだ。

(以下略)

■2002.09.03.(火)

林雅子展の開幕

林雅子展が開幕した。今日はプレオープンで関係深い建築家や友人たちが集った。展示は鈴木恂氏のデザインで細長い会場の両側壁面に設計原図を徹底的に並べたのがいちばんの見ものである。今後はもう無くなるトレペーに鉛筆手がきの整った美しい図が雅子さんの好んだ赤の縁に収まって並ぶ。今川研制作の亚克力模型が中央に並び台面からの白い光に照らされ空間の骨格を示しこれも美しい。

パーティのホール正面は雅子さんの手がけた舞台装置の赤い階段と白いテーブル。花田研制作の「海のギャラリー」模型はこのホールに置かれ、パーティの間に覗き込む方があるので説明しろというのに普段はよく喋る学生が妙に引っ込み思案であった。多くの親しい方々の顔が見え愉しく素晴らしい会だった。



海のギャラリー模型



会場風景

■2002. 09. 07. (土)

林雅子の設計姿勢

ヒルサイドプラザにトークセッション「戦後住宅の潮流と林雅子」を聴く。超満員だが私には席を確保してくれた。実に面白かった。篠原聡子(日女大)・鈴木恂・今川憲英・植田実・林昌二と揃えた役者がそれぞれ雅子の建築に対する姿勢を語る。空間の骨格そのものに迫る態度、模型より図面で考えるプロセス、図面に対する思い入れ、時代を超え連続する空間の力、倫理感、空間のイメージを決める勝負のかけ方、分かり易さ等、そのデザインの特徴を浮彫りにした。終って奈奈や懸樋君らと展示をもう一度見たが、直線的に並べた図面の迫力は圧倒的、奇を衒わず、他からの理屈を借りることもなく空間そのもので勝負という態度が気持ちいい。同時出版の作品集はこれを余す所なく伝えている。

■2002. 09. 21. (土)

林雅子展大阪と戦後の潮流

帰国早々「林雅子展」大阪に。天六住まいのミュージアムの会場は入口に雅子好みの赤、全体が一目に見渡せ、照明を極力落して周囲壁面に図面、中に模型を浮かび上がらせ迫力ある会場構成だ。トークセッションは芸工大学生卒業生も多数来聴し満員の盛況、花田氏の周到な司会で雅子を浮彫りにした。植田氏は作品の現状を示して空間の骨格を、岡部氏は外側から見た雅子を、昌二氏は長年に亘る雅子の変化と変らぬものを、花田氏は模型の制作を通して理解した設計の配慮を、松隈氏は戦後の流れの中での位置づけを語って見事なトークだった。私にも発言を求められたが作品に表れる人柄と育ちの良さ、戦後社会とモダニズム教育の影、理念より空間の雅子を喋った。会期は10月6日まで。学生必見。

■2002. 09. 22. (日)

図面が語る林雅子の人格

「林雅子展」の迫力は何と言ってもトレペー原図だ。鉛筆手描きの一枚一枚が建築空間の存在を語りかけていてじっくり辿ると何時迄も飽きない。模型も空間の骨格と姿を示してくれるが建築自体を語る図面の力は圧倒的、雅子さんは模型でなく図面で考えたというのがその思考の工夫が図から伝わって来てCADの遠く及ばない所だ。今日では学生もプロもこんな世界から離れてしまったがこの展示は何度も来て見つめてほしい。昨日の私の発言を補足すると、雅子さんとは長年の遊び友達だが、言葉遣いや振舞いが丁寧上品でそれが作品に反映する。建築を借りて理念や主張を表現するのではなく建築空間そのものに真摯に向き合う。その態度が何より尊いと思う。

10日ぶりに東京に戻ったら今やもう秋だ。



「文文日記」中の鈴木氏のスケッチ

3人の女性先駆者が語る住まい・女性・社会 —旧同潤会大塚女子アパートメントの現代的価値—

渡辺喜代美

■歴史的検証の場としての現代的価値

同アパートメントをめぐるニュースはさまざまなかたちでごらんいただいていると思う。東京都は“壊して土地は民活のため売却”するといいい、その価値や保存再生の社会的意味にはなかなか心を開かない。しかし、多くの分野から意見や要望書を東京都に提出し、直接交渉なども行い現在も保存再生活動が続いている。見学会は建築学会を窓口として進め、これからも見学会や保存再生の活動は継続していくだろう。ここでは、UIFA 関連のものを報告する。



中庭で

8月3日の旧同潤会大塚女子アパートメントを生かす会主催であるシンポジウム「旧同潤会大塚女子アパートメントの現代的価値」のパネリストは、赤松良子、小川信子、駒尺喜美のお三方。女性の社会進出の道を切り開いてきた先駆者たち。コーディネーターは植田実氏。

今日まで“住まい・女性・社会”が関連付けて十分語られてきたことは少なかった。シンポジウムでは女性の社会進出、生活の拠点としての住まい、社会における女性の立場、機会均等などの視点から働く女性の都市型住宅「旧同潤会大塚女子アパートメントの現代的価値」を論じ、参加者を大いに刺激した。赤松氏は、女性差別撤廃条約などの過程に多く関わってこられたが、いまなお女性を取り巻く課題が多く、日本の常識は世界の非常識と手厳しい。大塚女子アパートメントの現場視察した状況から、活用分野を工夫すれば現代的価値は大いにあると語った。小川氏は、ライフサイクルと住まい方、コミュニティがある設計など、大塚女子アパートメントは単身用住居として凝縮された表現がされている。その現代的価値を大事にし、歴史的検証のためにも同潤会建築をすべてなくすわけには行かないと、保存再生を強く主張した。駒尺氏は大塚女子アパートメントの住人だった経験から、自立した人間関係の居心地のよさ、何気ないサポート、個のあり方などに触れた稀少な体験といい、以来、それぞれのライフスタイルで生きられる理想の生活を模索し続け、今秋、新しい生活空間「友だち村」を誕生させる。また、お三方はともに1930年生まれの大塚女子と同世代。旧いから壊す!というのには年を取ったら亡くなれ!というのに等しいと会場を沸かせた。

植田氏は、都市の記憶を生かすことは壊すこと以上に想像力の必要なこととして、これからのあり方を示唆した。会場から山田初江、富田玲子氏らも発言し、創造力をもって再生活用へとエールが送られた。

共催に日本建築学会、日本建築家協会、DOCOMOMO Japan, UIFA JAPON, 女性と仕事の未来館、NPO コレクティブハウジング社、NPO 福祉マンションをつくる会、生活科学運営、コミュニティネットワーク協会、後援に日本建築士会連合会、東京建築士会が加わったことも、非常に高い評価のできることであった。

9月9日の見学会では、13名の参加者が居住空間、共用空間、店舗など視察。1930年の建物の中で“生かして使い続ける価値と魅力がある”という思いは共通していたように思う。UIFA JAPON も再生活用の活動を主体的に担って行きたいものである。

〒102-0083 東京都千代田区麹町 2-6-5

麹町 E・C・K ビル 働生活構造研究所内

TEL 03-5275-7861 FAX03-5275-7866

メールアドレス uifa@LIQL.CO.JP

次回 UIFA 世界大会についてのアンケート結果

ご協力いただきましたアンケートが下記のようにまとまりました。UIFA JAPON 会員の皆さんの様々なテーマへの関心と、積極的な姿勢が伝わって来ます。この結果は UIFA 本部にご報告いたしました。

Q1 希望開催地

候補地 () は投票数
オーストラリア (8) 香港 (5) フランス (5) その他 (6) ハーグ、シンガポール、ロンドン、 ベネチア、ミラノ、イタリア

Q2 候補テーマ

①都市防災に対する女性建築家、都市計画家の参加	2
②男性社会の中の女性の発展はいかにして可能か	2
③歴史的建造物の利活用	1
④その他	<ul style="list-style-type: none"> ・女性と建築 (女性の視点は建築をどう変えられるか。又は、女性の視点と建築との関わり etc) ・21 世紀の建築家の役割 (特に女性の視点からの空間はどうあるべきか) ・9、11 後の世界平和に向けて女性建築家の役割 ・女性の参加がどこまで社会 (環境) を変えるか ・グローバル化と女性建築家 ・異文化交流と女性の立場 ・国際化社会における女性の役割 ・建築におけるネットワークの可能性 ・各国の国家的プロジェクトの紹介とそれに参画している女性の活動状況について ・21 世紀における歴史的街並み景観の保全とその意義 ・歴史を生かしたまちづくり (歴史と東京) ・歴史的建造物の保存と活用 ・世界大戦終了後半世紀を経て、各国の建築家は自国の文化・自国の建築的伝統・自国の環境と自然の独自性について、どう守り育てたか。それはどう、設計に生かされたか。均質化する建築的形態はどう歯止めをかけるか? ・4 世代にやさしい地域づくり ・社会的観点からみた住まいについて ・地球環境の再生・保護 建築家の役割 ・自然災害による被災地における女性の力 ・都市防災・環境・景観という分野での女性の役割

役員会報告

第 5 回 2002 年 8 月 28 日 (水)

出席者: 小川 飯田 飯島 栗山 須永 中野 東 正宗 松川 山田 吉田 (あ)、
吉田 (幹)、渡辺

議 事: ・各支部報告・10 周年記念事業に向けて・UIFA JAPON 案内冊子制作に向け検討・NEWS LETTER 広告担当理事一年分決まる。

第 6 回 2002 年 9 月 24 日 (火)

出席者: 小川 飯田 飯島 栗山 須永 高橋 中野 松川 山田 吉田 (幹)

議 事: ・各支部報告
・10 周年記念事業委員会を発足。ド・ラ・トゥールさんをお招きして、記念講演を開催する等、記念写真展、記念事業、記念パンフレットの検討に入る。

ユニバーサルデザインを考える

大学教育におけるユニバーサルデザイン

神奈川大学 山家京子

2、3 年前にある自治体からユニバーサルデザインに関するアンケートの依頼を受けた。建築学科の教育の中でユニバーサルデザインを教えているか? 教えているとすれば、それは単独の科目か? などを問うものであった。その地方自治体 (あるいはその職員) が多くの建築関係者と接するうちに、あまりにその意識の低さを嘆き「だいたい大学でちゃんと教えているのだろうか?」ということになったらしい。残念ながら、神奈川大学に「ユニバーサルデザイン」という科目はない。「建築計画」の 1 コマで「バリアフリー」との相違やその理念なりを教えたり、設計製図において個々に指導したりする程度である。

2 年前にカナダのマニトバ大学を訪れた。建築学部にはユニバーサルデザインやサステナビリティのコースが用意され、それぞれ専門の教員が担当している。終身在職権の審査制度があるため、数年単位の運用が可能なのだ。学生たちの幅広い興味に柔軟に対応するシステムとして、実によくできている。

日本の学生たちのユニバーサルデザインに対する意識は決して低いものではない。私の研究室でもゼミの発表でテーマとして採り上げる学生がいる。前述の北米の大学のようなシステムでなくても、単位互換制度を利用して他大学のスペシャリストの授業を受講する、あるいは企業実習の制度を採り入れるなど柔軟なシステムの導入を図っていければと思う。

水彩フェスティバルの報告

須永倭子

UIFA の皆さまにもお伝えし、参加いただいた「水彩フェスティバル」(水彩フェスティバル実行委員会主催) が 9 月 28、29 日に行われました。28 日は雨でしたが、翌 29 日は良い天気となり、ウォーキングと組み合わせた花船の運行は大変盛況となりました。この日の花船運行には意味がありました。江東区はゼロメートル地帯と言われるとおり、区の東側は水位を低下させることにより水没を免れています。そのため花船の航路にはパナマ式運河と同じくみの開門が設置されているのですが、日曜日は休日としてこれまで開くことがありませんでした。お願いして初めて日曜日に開門を開けていただくことができたのです。参加者にもその施設の重要性をアピールすることができました。記念すべき 1 日となりました。

■編集後記

平倉直子の言葉に出会った建築家は生活力旺盛。建築の仕事は女性にとって入って行きやすい…(井田)、皆で活動していると、力がいっぱいもたえて元気がでます(須永)、60 年以上前に母が暮した家を探して中国の長春へ行きました(田中)、平壤で終戦を迎えた五木寛之と母の運命は不条理と深い悲しみ(中野)、初めての編集長で「女性建築の特集号。無事発行に至りホッと胸をなでおろし。(安東)10 周年を契機に UIFA JAOPN の案内を作成中。キーワードは「女性建築界国際交流持てる力を結集しよう」。次別は 2003 年、皆様の発展を願って(渡辺)

火山灰・シラスを活用した、洋間と調和するデザインの内装用左官壁。
消臭・調湿機能に優れ、安らぎに満ちた風合いが癒しの空間を演出。

こだわりのある建築家に今、選ばれています!!

先進の環境資本主義集団
株式会社 高千穂
ライフニクス

0120-011-535
FAX0120-295-559
takachino-lifenics.com

〒229-0011
横浜市西区高島2-3-22横浜01ビル

自然素材 100%

石膏ボードに直塗り可能

株式会社 藤原中霧島壁

マグマセラミック素材・内装用多機能左官壁

特許第3283799号 著作権第19426号

U.S.A. 特許取得済・国土交通省認定(不燃材料)NM-0088号

(有)建築計画連合

代表取締役 藤澤佐和子

住宅・教育・医療・福祉施設等
調査・基本計画・設計監理

〒466-0814名古屋市中昭和区妙見町1-13
TEL (代)052-833-3496
FAX 052-833-3476
Eメール yanagi-sa@kenchiku-apa.co.jp
URL http://www.kenchiku-apa.co.jp

2003年
フラワーレッスンご案内

1~8月(金曜日14:00~16:00)

●お申し込み・お問い合わせ
丸の内フラワーレッスン事務局

TEL 0120-177-905